



多田 幸雄
双日総合研究所
相談役

南北戦争の絵葉書

米国の首都ワシントンは13年住んだ第二の故郷。歴史好きのワシントンニアンになり切っていた2001年の晩秋、自宅の郵便ポストを開けると南北戦争仲間のゲリーから絵葉書が届いていた。夕闇迫る中で一瞥すると南北戦争の模擬戦の写真。不鮮明だし、そのまましまい込もうとしたが、「自分自身の姿が気に入ると思うよ!」という短いメッセージが気になった。なんだろうと思って明るい照明の下で再度、絵葉書を見てようやく納得。そして感動した。まさしく自分の姿が写っていたのである。ぼやけた写真は、2001年夏の「第一次ブルラン」の戦いの再現で、全国のキオスクで販売された公式の記念絵葉書になっていた。

まさに総攻撃の最中で、黒色火薬の硝煙で周囲が霞む戦場風景だから、ピンぼけなのは仕方がない。「ブルラン」というタイトルの背後に我が部隊がズラリと整列している。しかし、

カメラ目線で正面を向いているのは当方一人。といってもそんなに颯爽とした姿ではない。茫然自失の態。この直後に戦闘は突然中止になった。暑さから倒れる兵士が続出したからである。参加9,000人の内、脱水症状で倒れた兵士は400人を超え、騎馬隊に替わって四輪バイクの救急隊が戦場を走り回る大騒動。その模様は夜の地元テレビで放映され、翌日の新聞各紙でも大きく取り上げられた。

それから15年以上経ってトランプ大統領が就任すると、経済同友会の代表幹事特使として訪米する際に、この絵葉書が役に立つことになった。米議会や関係省庁、各地の州政府、シンクタンクなどで、名刺代わりにラミネートした絵葉書を配りまくったのである。お陰で初対面でも話が弾むきっかけになり、後日再訪すると、至るところで机や棚に飾ってくれていた。



丸枠内が筆者